

〈翻訳・資料紹介〉

コルチャック先生の教育者教育 若い教育者へのメッセージ
—著作からの抜粋・論文集—

塚本智宏

Dr. Korczak's teacher training ; a message for young teachers
— Selected excerpts from the works of Janusz Korczak —

Chihiro TSUKAMOTO

This brief translated collection is selected from the most popular books and essays of Janusz Korczak (1878-1942), works written largely for the training of young educators in the 1920s. Included here are translated excerpts 3 volumes - "The Boarding School", "Summer Camps", and "House of the Orphans" - of *How To Love A Child* (1920), his most representative work from the period following the Poland's independence and the establishment of education and child welfare infrastructures, and in which he summarizes his personal practices and research concerning children. Here also are complete translations of the articles *Theory and Practice* and *Teachers Trained by Children*, which are short but much-loved lecture notes and essays in which are condensed Korczak's practical ideas regarding research and teacher education in the field of 'special pedagogy'. The documents herein trace Korczak's pedagogical practices based on his conception of children's rights.

This collection is selected and translated from the following Polish and Russian texts ;

Janusz Korczak, Janusz Korczak dzieła, t. 7, Warszawa, 1993.

Janusz Korczak, Pisma wybrane, t. 2, wstęp i wybór A. Lewin. Warszawa, 1978.

Ianush Korchak, Kak liubit' rebenka, Kniga o Vospitanii, Moskva, 1990.

Ia. Korchak, Pedagogicheskoe naslenie, sost. K.P. Chulkova, Moskva, 1990.

本翻訳資料集は、ヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)が主に若い教育者向けに書いた著書や論文のなかから、もっともポピュラーな作品や文章を選択・抜粋したものである。時期的にはほぼ1920年代の著作を対象にしている。ここに収められているのは、ポーランドが独立しその教育・児童福祉事業を開始した直後の1920年の彼の代表的著作で、自らの過去の実践・子ども研究をまとめた『子どもをいかに愛するか』の寄宿学校(寄宿舎)編、夏期コロニー編、孤児の家編の3編の著書と、その後携わった国の特殊教育の分野での研究や教員養成事業に関する講演記録や論文(「理論と実践」や「子どもによる教育者の教育」は、手短かだが彼の実践的な思想や経験が凝縮されている好作品である)の全訳あるいは部分訳である。本資料集の編集は、彼の子どもの権利思想に基づく教育実践のあり方を示すことを意図している。

キーワード: コルチャック, 教員養成, 自己教育, 子どもによる教育, 理論と実践

解説にかえて

I. 本資料集は、ヤヌシュ・コルチャック(1878-1942)が若い教育者向けに書いた著書や論文のなかから、もっとも代表的な作品を中心にそれらの著作から選択・抜粋したものである。以下がそれらの著作である。

- I. 「19世紀隣人愛思想の発展」『みんなの読書室』52号 1899年
- II. 『子どもをいかに愛するか 家庭の子ども編』1918年
- III. 『子どもをいかに愛するか 寄宿学校編』1920年
- IV. 『子どもをいかに愛するか 夏期コロニー編』1920年
- V. 『子どもをいかに愛するか 孤児の家編』1920年
- VI. 「理論と実践」『特殊学校』1925 nr 2
- VII. 「子どもによる教育者の教育」『特殊学校』1926 nr 2
- VIII. 『もう一度子どもになれば』(まえがき) 1925年

IX. 「感性」1927/8nr3-4 『特殊学校』

X. 『子どもをいかに愛するか』(第二版 まえがき)1929年

XI. 『子どもの権利の尊重』1929年

上記テキストのうち、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴの『子どもをいかに愛するか』の寄宿学校(寄宿舎)編、夏期コロニー編、孤児の家編の三編(いずれも1920年)は、ポーランドが独立しその教育・児童福祉の事業を開始するその時期に特に若い教育者向けに自らの過去の実践・子ども研究をまとめたものである。また、その直後、彼は国の特殊教育の分野での研究や教員養成の事業に携わることにもなり、Ⅵ、Ⅶ、Ⅸのようなその時期の講演記録や論文が残されている。これらのうち「理論と実践」や「子どもによる教育者の教育」は、手短かだが彼の実践的な思想や経験が凝縮されている好論文である。わが国ではコルチャックの思想のこういったテキストがまだまだ決定的に不足している。そのごく一部を担う作業として本資料集を作成した。なお、各テキストの内容に関して原典にはない見出しを<>に記している。

それはいうまでもなく、引用者の現時点の理解・解釈を反映している。

Ⅱ. この資料集をつくるにあたっての基本的な考え方について述べておく。彼が若い教育者向けに伝えようとしたメッセージの中心にあるのは、子どもが「すでに人間である」ことの承認とそして別の表現でいえば子どもの時期の人間の権利の承認である*。これを前提として、本資料集の引用・抜粋・編集のさらなる視点を示すなら、以下に述べる1から5の点である。そしてさらにその内容に関しては、本文で紹介する上記Ⅰ-Ⅺの各テキスト文章への前記の見出しキーワード・キーセンテンスを列記する形で示している。これらもまた、私なりのコルチャック理解を示すものであるが、テキスト間の関連を意識し配列したものとなっているはずである。この点を含めご批判・ご意見を請うところである。

1. 子どもは人間、しかしわれわれとは異質の人間として尊重すべきこと。

子どもは大人と同様に人間であるが異質な人間であり、その異質のままにまた異質さのゆえに尊重され愛されて然るべき、そういった子どもという人間存在を承認すること。それは、教育者にとっては、実践的には、子どものなかの人間性を絶えず探求すること、そしてそれら子どもの「人間的な価値、美点、特徴、志向、望み」に対し、それらを信頼し尊重し愛することである。

<子どもはすでに人間である。>^ア <百人の子どもは百人の人間>^サ <教育者よ、子どもの世界のフェアブルたれ!>^ト <ますます近くで子どもの中に注目すべき特徴をより多く発見できるようになるために>^リ <子どもという人間の精神構造、大人との異同>^エ <私達は子どもを知らない 子どもは私達と違う人間だ>^カ <子どももわれわれと同じ人間だが異邦人>^レ <彼らの感性の高みへ>¹ <人間を認識すること、まずは子どもだ>^ヨ <一緒に感じることだ>^ウ <子どもは友人としてふさわしい価値をもつ>^ル

2. 三つの子どもの基本的な権利、特に子どもの今日を生きる権利

子どもには“子ども”であるがゆえに奪われてしまっている人間としての権利がある。とりわけ、今現時点の子どもの要求・あるがままを受け止めることが必要だということである。

<自由のマグナカルタ、三つの子どもの基本的な権利>^イ <教育者は今日という日に責任を負っている>^ホ <子どもの今、今日という日を尊重されよ>^ロ <(あるがまま)幻想でなく、親の過剰な期待でなく、起こるべくして起こること、当然そうなるはずのこと・>^リ <子どもがあるがままで存在する権利>^リ <教育者の課題は、彼を生かし、彼が子どもであることの権利を獲得させることだ>^ン

3. 教育者の自己教育

教育者はいかに自分を育てていくのか、その際の人間としての自己教育・自己研鑽の方法を自覚することが必要だという点、また将来考えていくことになるであろう更なる子ども探求の姿勢、そして、教育者の人生における理論と実践の意味について。

<教育者の自己教育 自分を知り育てること>オ <子どもへの偏見 大人も未熟だ>キ <自分自身の目でその子ども自身を観察し捉えるのだ>ク <心理学や教育学のマニュアルで頭をいっぱいにしてはいけない>ケ
<理論とは、実践とは>ヌ <偽りの理論的命題>テ <ルーティンか探求か>ネ <教育者にとっての真理・財産とは>リ

4. 子どもに学ぶこと、子どもによる教育者の教育

教育者を成長させ、また日常の実践において依拠すべきは、子どもである。子どもは子どものことをよく知る専門家である。教育者は子どもから何をどのように学ぶのか、そして、そこにはどのような意味があるのかということについて。

<子どもには学ぶものがある>チ <教育者は人間（子ども）・社会（子どもの集団）を理解しながら・・・成長する>マ <子どもは私を経験によって豊かにし、私の見解や私の感性の世界に影響を与える>ミ <教育者にとって子どもは自然の書物である>ム <子どもは教育者に対して、厳しくたしなめ、罰を与えることも、報復することもある>メ <私が良い人間でいられるように>ツ <教育者の体質の改善のために>ニ

5. 子どもの涙を理解できる教育者に

コルチャックが相対した子どもはその時代の「特殊教育」の対象となるいわゆる教育困難な子どもたちであるが、そういった彼らをいかに理解し共感し愛するのか、教育者に期待される基本姿勢について。

<子どもはなぜ嘘をつくのか・・・>セ <法典,それはあれやこれやの羅列でなく、人間の相互承認・相互信頼・相互尊重の形成をめざす体系であるべき>ナ <子どもの数だけ、泣き声の数、子どもの涙がわかる教育者に>タ <教育者にとって最も肝要なもの>リ <子どもの悲しみを理解されよ>ハ <後悔の涙や無力の涙のことを理解できる、そういう高みへ自分を育てよ>ヤ <自分のことを理解しすべてを知って愛し続けてくれた大人、それが教育者>ヒ <その子が心の闘いをやめるとき>フ <助けることができないならただ痛みを緩和する>ヘ <罪を犯した子どもには愛情が必要である。彼らと連帯を>フ <あなたは必ず間違いをやるはずだ>シ <「よい教育者・・・とは」、過去の間違いの数・・・>ス <あなたの子どもは国家や教会や企業の影響下で生活している>ジ <管理するという仕事>ト

Ⅲ. 翻訳の原典については、ロシア語版とポーランド語版を併用した。拙書『コルチャック 子どもの権利の尊重』（子どもの未来社,2004）巻末資料ですでに翻訳紹介しているテキスト資料もあるが纏まりあるテキスト集とするためここに採録している。コルチャックの代表的著作『子どもをいかに愛するか』（全4編1919-20年）並びに「子どもの権利の尊重」（1929年）のポーランド語原文またロシア語版テキストは、以下の①および②③のテキストを利用した。

① Janusz Korczak, Janusz Korczak dzieła,t. 7, Warszawa,1993.

② Ianush Korchak,Kak liubit' rebenka,Kniga o Vospitanii, Moskva,1990.

③ Ia.Korchak,Pedagogicheskoe naslenie, sost. K.P.Chulkova,Moskva,1990.

なお、1929年のエッセイ「子どもの権利の尊重」は、

④拙訳「資料紹介:コルチャック著『子どもの権利の尊重』」（季刊教育法 92号, 1993年）で試みた翻訳をほぼそのまま利用している。

また、『子どもをいかに愛するか』については、

⑤拙書『コルチャック 子どもの権利の尊重』ですでに紹介したものについてはそのままの翻訳を踏襲している。本資料集ではじめて紹介するものについては、②のロシア語版stp.268-272,278-9と並んでポーランド語原典の

⑥ Janusz Korczak, Pisma wybrane, warszawa,1978,t. 2,wstep i wybor A. Lewin,s.121-127,141-2を利用している。

これらの典拠をそれぞれのテキスト冒頭の見出しに付した。

* コルチャックの子どもの権利に関する基本的な考え方については、拙書『子どもの権利の尊重』、ならびに、以下の拙稿をご参照いただきたい。“ヤヌシュ・コルチャックの子ども観と子どもの権利尊重の思想—子どもを人間としていかに愛するか—”『市立名寄短期大学紀要』40号、-頁2007,3月。

資料集：コルチャック先生の教育者教育 若い教育者へのメッセージテキスト*

*本文中の引用冒頭の数値はその著書の章数である

I. 「19世紀隣人愛思想の発展」1899年(⑤)

<子どもはすでに人間である。>ア

「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である。・・・

彼らの理性に向かって話しかければ、我々のそれに応えることもできるし、心に向かって話しかければ、我々を感じとってもらえる。

子どもは、その魂において、我々がもっているところのあらゆる思考や感覚をもつ才能ある人間なのである。」

II. 『子どもをいかに愛するか「家庭の子ども」編』1918年(⑤)

<自由のマグナカルタ、三つの子どもの基本的な権利>イ

「37. お伝えします！ひょっとしたら今我々はあなた達と意見がまとまるかもしれないし、あるいは、永久に意見を違えるかもしれない。どんな思想も、それがうっかり口からこぼれそうになったり、ひっそり身を隠しているものでも、また、勝手にさまよい歩くどんな感情も、意思の骨折りを通じて、秩序を呼び寄せ規律正しい隊列に配置しなければならない。

私は、自由のマグナカルタを、子どもの権利を訴えたい。おそらく、それらよりもっと大きなものになるだろうが、私は三つの基本的なものを規定する。

1. 子どもの死に対する権利。
2. 今日という日に対する子どもの権利。
3. 子どもがあるがままでいる権利。

子どもは、これらの権利を受け取りながら、可能な限り少なく、過ちを犯すことを知るべきである。過ちは避け難いものである。しかし、穏やかに、彼は自分でそれを正すようになる、驚くほど注意深く。ただ、我々がこの価値ある才能や彼の防御の力を弱めなければの話である。」

<(あるがまま)幻想でなく、親の過剰な期待でなく、起こるべくして起こること、当然そうなるはずのこと・・・>ウ

「50.・・・

貧しい家庭の子どものための夏期コロニー。太陽、森、川。子どもたちは陽気さ、善良さ、礼儀作法を吸収する。昨日が小さな野蛮人、今日彼は共鳴しあう遊びの参加者。塞ぎこみ、臆病で、動きが鈍い子。それが一週間あとは果敢に、生き生きと我先にと率先し、歌を歌う。ここでは、1時間1時間、週から週へと、変化する。そこかしこ変化しないどんなものもありえない。これは奇蹟ではないが奇蹟的なことが起こらないことがないのである。そこには過去にあったことだけが、そして予期されたことだけが起こる、つまり、過去になかったことは起こらないのである。

心臓に障害のある子どものこと、ゆっくりした動作、言語活動はこっけいですらある。息切れしながらどの動作もその子にとっては生きることそのもの、咳、苦しみ、痛み。その子はそうなるはずだ。

農民は、その目は天と地を凝視し、それ自身地の果実であり産物であるが、人間の権力の限界を知っている。・・・都会人には、人間的能力について過度に高い理解がある。・・・すべてを買うことができるし、あらゆる困りごとに助けがある。子どもが元気をなくすと医者がある。成績がよくなければ家庭教師だ。また、本は、何をすべきかを注釈しながら、すべてが到達可能との幻想を生み出す。

母性は、女性を高尚にする。女性がそれを拒み、否定し、犠牲にするとき、そして、偽りの善で子どもを覆いながら、その士気を失うとき、子どもを自分の見栄や好みや煩惱へとずたずたに裂いてしまうことになる。

私の子ども。これは私の所有物、私の奴隷、私の室内用ペット犬。・・・

子どもは、裁判所のホールの肖像画や劇場ロビーの胸像のような形で残されるか否か、そのあたりはずれ

が肩にかかっているような宝くじのチケットではない。」

＜子どもという人間の精神構造、大人との異同＞I

「64. 我々大人の精神構造と子どもはどこが異なるのか。その特性はどこにあり、その要求はどのようなものか。潜在的な、まだ現れていない可能性とはどのようなものか。我々と伝統的な二分において並び立ち、生活をともにしているその人類の半分を占める者たちとは何か。我々は彼らに明日の人間という負担を強い、今日を生きる人間の権利を与えていない。

・・・

子どもはまだ話し始めていないが、もうすべてを聞いている。

子ども、これは百面相で、有能な俳優が百の役を演じるようなものである。

・・・

本性の分野で彼に不足しているのは唯一、それは実際あるようだが、今のところなおあたかも霧のように散らばっているエロチックな予感である。

感性の分野ではその力において我々にまさっている、なぜならそれを阻止するものが作り上げられていないからである。

知性の分野では、少なくとも我々と同等である。不足しているのは経験だけである。

だからこそ、大人がしばしば子どもになるし、逆に、子どもが大人になる。

残りのあらゆる境界は、子どもは賃金を受け取り働くことがない、そして、扶養されているので、従属することを余儀なくされているという点にある。」

Ⅲ. 『子どもをいかに愛するか 寄宿学校編』 1920年 (①②⑤)

＜教育者の自己教育 自分を知り育てること＞I

「8. 自分自身であれ。固有の道を探せ。子どもたちを知ろうとする前に、自分のことを知りなさい。子どもたちの権利と義務の範囲について輪郭をつかもうとする前に、自分ができることについて自分自身に報告されよ。あなたがあなた自身、他でもない、何よりも先によく知り育て教えなければならぬ子どもなのである。

教育学というものが、子どもに関する学問であって人間に関する学問ではないと見なすことは、最も深刻な誤りのひとつである。

＜私達は子どもを知らない 子どもは私達と違う人間だ＞II

激しやすい子どもは我を忘れて人を叩いたが、大人は我を忘れて人を殺した。無邪気な子どもはおもちゃを騙し取られたが、大人は手形に署名を取られた。軽率な子どもはノート代でお菓子を買ったが、大人はトランプで全財産を失った。子どもがではない。そこにいるのは、知識の量、経験の蓄積、欲望、感情の動きが異なる人々だ。私たちが子どもたちを知らないということを覚えておくべきだ。

＜子どもへの偏見 大人も未熟だ＞III

未熟！？

老人に尋ねてみるがいい。たとえ40歳になったとしても、老人は、あなたを成熟したとは見なさない。いやそれどころか、どの社会階級も未熟だ、弱いからだ。また、どの民族も他者の後見を必要としており、やはり未熟だ。大砲をもっていないからだ。

＜自分自身の目でその子ども自身を観察し捉えるのだ＞IV

自分自身であれ。そして子どもたちが自分自身であると思われるときに、子どもたちを熟視するのだ。よく見るのだ。しかし要求をしてはならない。生きている、血気盛んな子どもに心を集中させたり、静かにしていることを強いてはならない。疑いを抱いている者、気を滅入らせている者は人と仲良くしたり、打ち解けたりはできない。自尊心が強い者、わがままな者は優しく、おとなしい者にはならない。

ところであなた自身はどうか。

もし、あなたが、子どもの心に吹き込むようないかめしさや頑丈な肺を持っていないのなら、騒ぎ立てる子どもたちに秩序を求めても無駄なことだ。しかし、あなたには善良な微笑と忍耐強い眼差しがある。何も言わなくてもいい。子どもたちは自分から静かになるかもしれないではないか。子どもたちは自分たちの道を探しているのだ。

<心理学や教育学のマニュアルで頭をいっぱいにはいけない>ケ

心に心理学の帳簿を、頭に教育学の法典を持った立派で円熟した教育者にすぐにもならなくてはならないなどと考えるはいけない。あなたには素晴らしい同伴者、まばゆいばかりの若さがあるではないか。ところが、あなたはぶつぶつ屋を、古臭い経験を呼び出そうとしている。」

<あなたの子どもは国家や教会や企業の影響下で生活している>J

「10. 子どもにあらゆる精神的な諸力の調和的な発達の自由を保障し、かくされた可能性をことごとく導き出し、善なるもの、美、そして、自由への尊敬の念を育てること・・・

無邪気な者、やってみるがいい。あなたは、社会から小さな野蛮人を与えられ、その社会は彼らが礼儀と文化に慣れ、仕込まれ、ものわがりのよいものになるように期待しているのだ。国家と教会と未来の企業家が期待している。それらは要求し、期待し、引き続き追い求めている。国家は官製の愛国主義を求め、教会は教条的な信仰を、将来の企業家は正直さを求め、それらすべてが平凡さと温順さを求めているのだ。過度に強ければ打ち砕き、物静かであれば押し込み、裏表あるものは時折買収し、貧しきものには常に道を切断するのだ。だれが？だれでもない。現実生活がだ。

・・・

子どもには、望み、願い、要求する権利があり、成長する権利とそして成熟する権利、また、その達成によって果実をもたらす権利がある。ところが、教育の目的は、騒がないこと、靴をやぶらないこと、よく聴き指示をこなすこと、批判することのないこと、また、これらすべては子どもにとっての善であることを信じていることなのである。

いや、戒律がある。自らの隣人を愛せよと。これこそ調和であり、広大な自由の境地であり、自由である。周りに目を向けられよ、彼らは微笑んでいるじゃないか。」

<百人の子どもは百人の人間>サ

「14.・・・百人の子どもは百人の人間だ。それは、いつかどこかに現れる人間ではない。まだ見ぬ人間もなく、明日の人間でもなく、すでに今、人間なのだ。小っちゃな世界ではなく、世界そのものなのだ。小さな人間ではなく、偉大な人間。「無垢な」人間ではなく、人間的な価値、人間的な美点、人間的な特徴、人間的な志向、人間的な望みを確かに持った存在なのだ」

<あなたは必ず間違いをやるはずだ>シ

「34. 教育者というものは、陳腐化した言葉使いやありふれた振る舞いといった悪習から生じる間違い、子どもたちを、自分には責任を持たない、その無邪気な未経験のゆえに滑稽で、下等な存在とみなすそういう日常的な態度から生じる間違いを避けることができない。

子どもたちの心配、望み、疑問に対して、軽蔑的な態度、ふざけた態度、保護者然とした態度をとるなら、必ずやひどく感情を害する子どもがいるはずだ。

子どもは自分の悲しみ、たとえば石を失くしてしまったときなどの悲しみに対して、尊重を求める権利を持っている。自分の望み、たとえば冷え込みの厳しいときに外套なしで外を歩きたいなどという望みに対して、尊重を求める権利を持っている。一見ばかげた質問に対しても尊重を求める権利を持っている。あなたは子どもが失ったものに対して無関心だ。子どもの頼みに対してそっけなく“だめだ”と拒否する。子どもの疑問に対して短く、“なんて馬鹿なんだ”とさえぎってしまう。

だが、少年が暑い日になぜマントを着たがったのか、あなたは知っているのか。長靴下のひざのところに不格好な継ぎがあって、庭に少年が好きな少女が来るからだ。

あなたには時間がない。明らかにばかげた望みのなかに隠された動機を迫及したり、考えたり、見つけ出したりすることは、いつもできるわけではない。子どもの論理や空想や真理探究といった研究未開拓の奥底に、いつもいつも入り込むことはできない。子どもの志向や好みにいつもいつも適応できるわけではない。

あなたはこれらの間違いを犯すだろう。なぜなら間違いを犯さないのは何もしない者だけだから。」

<「よい教育者・・・とは過去の間違いの数・・・」>ス

「36. よい教育者と悪い教育者とを分かつのは、その犯して来た間違いの数と子どもたちに与えてきた害の数。それらにつくる。

よい教育者は一度しか犯さない間違いがある。批判的に評価し、いつまでも覚えていて、二度と繰り返さない間違いがある。疲労のため、無神経な行為や不公平な行為をしてしまうようなとき、よい教育者は些細

な、うんざりするような仕事を機械化するようあらゆる努力をする。すべての不都合は時間がないために生じるということを知っているからだ。悪い教育者は自らの問題を子どもたちのせいにする。

よい教育者はちょっとした出来事についても何を考えるべきか知っている。ちょっとした出来事でも一つの問題が隠されていることがあるということを知っている。どんなことでも軽視したりしない。

よい教育者は、勝ち誇る行政当局や君臨する教会の要求を受け、昔から定着している伝説や習慣に引きずられ、存在する諸条件の鉄のような強制を受けて、自分が何をしているのかを知っている。よい教育者は、この強制が、子どもたちにへつらいや服従、依存心を教え、将来における妥協へのしつけをすることに関してのみ、子どもたちの善を考えているのだということを知っている。

悪い教育者は、子どもたちが騒がないように、服を汚さないように、文法の規則を一生懸命暗記するように、実際そのとおりにしなくてはならないと考えている。

賢明な教育者は子どもたちを理解できないときも気分を悪くしたりはしないで、考え、探し求め、子どもたち自身に尋ねる。腫れ物に触るような接し方はよくないということ子どもたちは教えてくれる。学ぶ気があればよいのだ！」

<子どもはなぜ、嘘をつくのか・・・>ㄷ

「60. 私の原則

“子どもには罪を犯させるがよい”

私たちはあらゆる行動を予防しようとはしない。子どもが迷っていたら、道を教えてやればよい。つまりいたら、助けに飛んで行けばよい。最もつらい心の戦いのとき、私たちがそばにいても構わないということ覚えておくべきだ。

・・・

覚えておきなさい。

“子どもには、うそをいってしまったたり、ずるい手段で手にいれてしまったたり、無理矢理とってしまったたり、盗んでしまったたりする権利がある。

しかし、子どもには、うそをいったり、ずるい手段で手に入れたり、無理矢理とったり、盗む権利はない。”・・・・・・」

「61. 子どもに間違いを犯すこと、そして、喜んで矯正へと向かうことを許してやりなさい。

・・・・・・」

「62. 子どもたちが嘘をつく。

子どもたちが嘘をつくのは、恐れているとき、真実が明るみに出ないことを知っているときだ。

子どもたちが嘘をつくのは、彼らが恥ずかしいと思うときだ。

子どもたちが嘘をつくのは、彼らが言いたくない、あるいは言えない真実をあなたが言わせようとするときだ。

子どもが嘘をつくのは、その必要があると彼らが思うときだ。

・・・・・・」

「67.

我慢できないくらいに強く何かほしいと思うとき、子どもは盗みをする。

子どもは、何か非常にたくさんあるとき、つまり一つぐらい取ってもいいとき、盗みをする。

持ち主がわからないとき、盗みをする。

自分が盗まれたとき、盗みをする。

必要であるとき、盗みをする。

そそのかされたとき、盗みをする。」

<ますます近くで、子どもの中に、注目すべき特徴をより多く発見できるようになるために>ㄹ

「84. 教育者は言う。「私の方法、私の見解」。理論的な素養が貧弱で、勤務経験が数年しかない場合でも、教育者はそのように言う権利がある。

教育者は証明して見せればよい。その方法や見解を彼に教えたのは、これこれの環境の中での、これこれの分野での、これこれの資料による仕事の経験だということ。自分の立場の正しさを論証すればいい。例を引用したり、論拠を補強したりすればいい。

私は教育者に最も困難で、危険を伴うことに対する権利、すなわち、その子がどうなっていくかを予言、予測する権利をも与えよう。

しかし、自分が間違いをするかもしれないという認識を決して捨てないでもらいたい。教育者の見解のうち、その一つといえども、それが疑問の余地のない確信、変わらぬ確信になってしまわぬようにしてもらいたい。今日という日が昨日の観察の総和から明日のより大きな総和への単なる移行であるようにしてもらいたい。

それぞれの問題やそれぞれの事実は一般の見解から独立して検討されるべきだ。いくつかの事実はお互いに矛盾する。一般的法則について予測できるのは、様々な場所における事実の量に関してだけだ。

これらの条件がすべて守られたときに初めて、教育者の仕事は単調で、見込みのないものではなくなるだろう。一日一日が何か新しいもの、思いがけないもの、奇妙なものをもたらし、新たなデータを付け加えてくれる。

そのとき、普通ではない、あるいはめったにない訴え、嘘、口論、請願、過失、反抗や詐欺や英雄的行為の現われは、教育者にとって、収集家や学者にとっての珍しい硬貨、化石、植物、空の星の位置と同じぐらい価値のあるものになる。

85. そのとき初めて、教育者はそれぞれの子どもを理性的な愛情で愛するようになり、子どもの精神的本質、要求、運命に関心を持つようになる。子どもに近づけば近づくほど、教育者は子どもの中に注目すべき特徴をより多く発見する。そして研究の中に報酬と、さらなる研究、さらなる努力への刺激を見出すだろう。」

<子どもの数だけ、泣き声の数、子どもの涙がわかる教育者に>

「(85. . . .)

寝息だけの静けさと私の不安に満ちた思考を号泣が中断させる。

私はこの泣き声を知っている。あの子だ。子どもの数だけ、泣き声の数がある。静かでひたむきな泣き声、気まぐれで偽善的な泣き声、甲高く、恥ずかしげもなく露骨な泣き声。

子どもが泣いているのは不快だが、押し殺したような、絶望した、不気味な号泣にだけは驚かされる。

“神経質な子ども”と言ってしまえばそれまでだが、それでは不十分だ。この本質を知らずに、小難しい名称をつけて満足していることがどれほど多いことか。寝言を言うから神経質だ。感受性が強いから、元気がいいから、元気がないから、すぐ疲れるから、歳に似合わず発達しているから、フランス人が言う *progénère* だから、神経質だと。

自分の実際の歳より 10 歳も上のような子どもたちがまれにはあるが、いる。そのような子どもたちはいろいろな世代の特徴を持っており、その脳回には苦難に満ちた数世紀の血みどろの苦しみが蓄積されている。わずかな刺激でも、潜在している痛み、悲しみ、怒り、反抗が表面に噴き出してきて、どうということもない刺激に対して不相応な激しい反応をしているような印象を与える。

泣いているのは子どもではない。過去の数世紀が泣いているのだ。嘆き悲しんでいるが、その子どもが部屋の隅に立っていたことによる悲しみではない。抑圧され、迫害され、虐待され、追放された過去の数世紀の悲しみなのだ。詩的に過ぎるだろうか。そうではない。答えが見つからない。問いかけをしているだけだ。」

IV. 『子どもをいかに愛するか 夏期コロニー編』 1920 年 (①②⑤)

<子どもには学ぶものがある>

「12. . . . これら全ての間違いを分析していれば、限りなく教訓になることであつたろうが、残念なことに、メモは取っていたのに、失敗は書き留めなかった。心の傷が余りに新しく、触れるには痛すぎたのだ。14 年後の今、細かいことはもう覚えていない. . . .

. . . . 5 日目だったか、6 日目だったか、ついにその夜が、最悪の夜がやってきた。」

「13. 子どもたちが薄暗い寝室のベッドで寝ていたとき、突然、調子外れのコンサートが始まった。

誰かが高く口笛を吹き、誰かが歌い出し、さらにもう一人が吠え、唸り始め、誰かが 2 度目の口笛を吹いた。これが間隔を置きながら、部屋のあちこちで繰り返された。

私は理解した。・・・」

「15. 翌日の夕方、一人の少年が私に警告した。騒動はまた繰り返されるが、たたかれても自分たちは降伏しない、棒を準備している、と。・・・」

迅速に、精力的に行動しなくてはならなかった。私は窓のところに明るいランプを置き、部屋に入るやすぐに棒を集め、明日、返すからと言って、自分の部屋に持ち帰った。

子どもたちは裏切りがあったことに気付いたのだろうか。明るい光でひるんだらうか。自衛のための武器がなくなって、計画を取りやめにしたらうか。ともかく私の勝ちだ。

陰謀、反乱、裏切り、懲罰、これらが、私の夢に対して生活が与えた返答だった。

“明日、話し合おう”。休暇の初めのころに振舞った甘い言葉“みんな、おやすみ”の代わりに、この脅迫的な約束が告げられた。

私は勝利者としての節度を見せたのだ。

生活はまたも私に教えてくれた。私たちの平穩無事は、私たちが思っていたように、ときに破局が私たちに襲った場所にあるということ。嵐のような危機がしばしば回復の始まりであるということ。

子どもたちの好意を失わなかっただけでなく、反対に私と子どもたちとの信頼関係は深まった。子どもたちにとって、これは小さなエピソードだったが、私にとっては大きな転機となる出来事だった。

私は、子どもたちが力であるということを知った。共同の仕事のために引き寄せることもできれば、退けることもできる力、考慮に入れるべき力であるということを知った。この真理に、私は奇妙な巡り合わせで、棒のおかげで、達することができた。

ある日、森の中で話をしたときのこと、私ははじめて、子どもにではなく、子どもと話をしたのである。それも、私が望むところの彼らがどうあるべきかということについてではなく、彼ら自身がどのように望みどのようにありうるかということについて話をしたのである。子どもには学ぶべき多くのことがあるということ、そして、子どもは要求し、条件を付け、その条件つきで実際やるということ、またそうする権利を持っているということ、私はそのとき理解したのである。」

<私が良い人間でいられるように>」

「21. 一昨日の騒動についての私の話は大体、以下の通りだ。私は少年をぶった。ひどいことをした。犬がかみつくであろうベランダに放り出すと脅した。ぞっとする行為だ。しかし私が二つの忌まわしい行為をしたことについて誰に罪があるのか。罪があるのは、私が腹を立てるように、わざと騒ぎを起こした子どもたちだ。私が罰を与えたのは罪のない子どもだったかもしれない。では罪があるのは誰か。散々ふざけておいて、暗いのをいいことに、身を隠してしまった子どもたちだ。昨日はどうして静かだったのか。灯りがついていたらだ。従って、私が不当な行為をしたのは君たちの罪ということだ。私は大いに恥ずかしい。だが君たちも恥じるべきだ。私は自分の罪を認めた。次は君たちの番だ。子どもたちには良い子と悪い子がいる。どんな悪い子でもその気になれば、改心できる。私はその手助けを喜んでする。君たちも、私と君たちが悪くなってしまうないように、私が良い人間でいられるように私を手伝ってほしい。私は大変悔しい。君たちの中の一人が目を打ち、もう一人が頭に包帯をしたことが。ある貴族が君たちに不満を持っていることが。警備員が君たちに対する不平を言っていることが。

その後、口々に語られたところによれば、彼はいい奴で、従順だ、あるいは、可もなく不可もなしだ、あるいは、自分自身でも分かっていないという。さらにその後の話では、彼は心から改心したがっている、あるいは、改心の気持ちが少しだけある、あるいは、全くその気はないという。私はこれら全てを書き留めた。私はグループの中で誰が右派で、誰が左派か、誰が中道かを知った…。

政治や裁判の演説集や説教集はよく見かける。だが子どもへの教育者の話の印刷物が無いのはどうしたわけか。お子様たちと話すのは簡単なことだと誰もが思っている。私は子どもたちへのメッセージのいくつかを一週間以上にわたって書き留めた。」

<偽りの理論的命題>」

「36. 私は主張した。

“一緒に遊びなさい”。

その気にさせようとした。

“君たちは30人、あの子は一人。それなのに君たちみんなは一人を改めさせることができなくて、あの子

一人が君たちみんなをだめにするというわけか”。

“でも、あいつを改めさせるにはどうすればいいのですか。僕たちと遊びたがらないし、仲間に入っても邪魔ばかりします”。

正しいのは子どもたちで、私ではなかった。

かなり後になってようやく分かった。教育者が不道徳な子どもたちを普通の子どもたちと一緒にいさせたいと思うなら、あらゆる責任と全てを監視する義務は教育者にあるのだ。子どもの手に負える仕事ではない。

一見、最も美しいと思われる理論的命題でさえ立証が必要だ。最も明白な真理でさえ、その現実への適用が難しいなら、誠実に、批判的に見直す必要がある。私たちは子どもたちよりはるかに経験がある。子どもたちの知らないことをたくさん知っている。しかし、子どもたちが何を考え、何を感じているのかは、私たちより子どもたちの方がよく知っている。

子どもが何かを欲しがっていて、どうしてかを言わないとき、その子どもは本当の理由を隠そうとしているか、あるいはそれを全く意識していない。教育者の手腕は、そのような半ば無意識の動機を知ること、ときにはそれを推測し、ときには探し求めることにある。

“そこに何か隠れている”。このように教育者が考えることがしばしばあればあるほど、その教育者は完成の域により早く達する。偽りの理論的命題に起因する間違いをより確実に避けることができる。」

<教育者よ、子どもの世界のフェアブルたれ!>

「49. フランスの天才的昆虫学者フェアブルは一匹の虫も殺さずに、画期的な観察を行ったことを誇りにしている。フェアブルは虫たちの飛行、習慣、喜び、心配事を観察した。

虫たちが太陽の光の中ではしゃぎ回ったり、戦ったり、戦いの中で倒れたり、食べ物を探したり、隠れ家を作ったり、蓄えをしたりするのを注意深く観察した。腹を立てることもなく、賢明なる眼差しで、かろうじて目に付くような自然の強力な法則を見守っていた。フェアブルは国民学校の教師だった。肉眼で観察をした。

教育者よ、子どもの世界のフェアブルたれ!」

V. 『子どもをいかに愛するか 孤児の家編』 1920年 (①②⑤)

<法典、それは、あれやこれやの羅列でなく、人間の相互承認・相互信頼・相互尊重の形成をめざす体系であるべき>

「仲裁裁判法典 前文

もし誰かが罪を犯したなら、一番良いことはその子を許すことだ。もしそのことを知らなくて、罪を犯したのなら、その子はもう既にわかっている。もしうっかり罪を犯してしまったのなら、その子は今後はより慎重になるだろう。ほかのやり方に慣れていなくて罪を犯してしまったのなら、その者は慣れるように努力するだろう。もし仲間に説き伏せられて、罪を犯したのなら、その子はそれ以上彼らの言うことを聞かなくなるだろう。

もし誰かが罪を犯したなら、一番いいのはその子がおおることを期待して、許すことである。」

「仲裁裁判法典 (と解説——塚本注)

第1~99条 “無罪と認める、あるいは、裁判所はその事件を審議しなかった”。

第100条 “裁判所は彼に罪があるとは言わない”。彼に対して叱責を宣告することも、腹を立てることもない。しかし、裁判所は第100条を最も軽い刑罰であるとみなしており、その処罰を判決グラフに含めている。

第200条 “彼は正しくない行為をした”。仕方がない。誰にでもあり得ることだ。私たちはその者に対して、今後、同じことをしないように願う。

第300条 “彼は悪い行為をした”。裁判所は有罪判決を下す。

第100条と第200条では、裁判所はこのようなことがもうないように願っているのに対して、第300条では、裁判所は二度と繰り返さないよう要求している。

第400条 “君は大変悪い行為をした”。あるいは “君は大変悪い行為をしている”。

第400条は重大な過失だ。第400条、それは罪人に対して、恥辱から免れさせようという最後

の試み、最後の望み、最後の警告だ。

第 500 条 “このような行為をした者、罪の程度などはどうでもいい、私たちの願いや要求などはどうでもいいと言う者は、自分自身を尊敬していないか、あるいは、私たちのことを考えていないかのどちらかだ。それゆえ、私たちもその者をこれ以上、許さない”。姓名とともに、判決が新聞の第一面で公表される。

第 600 条 裁判所は判決を一週間の期限内で、裁判告知板に張り出し、新聞で公表する。

第 700 条 第 600 条による罰則に加えて、第 700 条に従って判決内容が家族に通知される。罪人は退所の可能性もある。従って、家族に警告しておかなくてはならない。いきなり“家に連れ帰って下さい”と言ったりすれば、親族は、前もって言うてくれなかった、隠していたと言って、腹を立てるかもしれないからだ。

第 800 条 “裁判所は助けてやれない。昔の教育施設で行われていた罰なら、効果があるかもしれないが、私たちのところにはそのような罰はない。罪人に 1 週間の考える時間を与える。その間、その者は誰かを告訴することはできないし、誰もその者を告訴することもない。その者が改心するかどうか、長続きするかどうか、見てみることにする”。判決は新聞に公表され、告知板に張り出され、家族に通知される。

第 900 条 “彼が自分で、第三者の助けなしで改心できる見込みはない”。

“私たちは彼を信じていない”。あるいは、“私たちは彼を恐れている”。

さらには、“私たちは彼とはいかなる関係も持ちたくない”。

つまり、第 900 条によって、罪人は除籍される。しかし、誰かが保証人になれば、留まることも可能だ。既に除籍された者は、後見人が見つければ、復帰できる。後見人は裁判所に対して、被後見人のあらゆる過失の責任を負う。後見人になれるのは教員か、子どもたちのうちの誰かだ。

第 1000 条 “除籍される”。

全ての除籍者には、3 ヶ月経過後に復帰の請願をする権利が与えられる。」

<教育者の体質の改善のために>:

「私は絶対的に確信している。これらの [教育者を告訴しうる——塚本] 裁判手続きは、私の教育者としての体質上の再教育のための要石だ。それは子どもに対して良い態度をとることができるということではなく、それが教育者の勝手、専横、専制から子どもを守る機構であるからだ。」

VI. 「理論と実践」 1925 nr 2 『特殊学校』(②⑥)

<理論とは、実践とは>:

「理論のおかげで私は知る。他方、実践のおかげで私は感じる。理論は知性を豊かにし、実践は感性を開花させ、意思を鍛える。「私は知っている」とは、「私が知っているというそのことに応じて実際行う」ということを意味しない。見知らぬ他人の見解というものは私の生きた「私」において新たな意味を得るものでなければならない。私は理論的なものを手当たり次第前提にしたりしない。拒み、忘れ去り、迂回し、巧みに回避し、嫌悪する。結果として、私は、意識的にか無意識のうちにか、行為をコントロールする固有の理論を手に入れた。そして、これはひょっとしたら多くの理論の断片かもしれないが、私の中に根付き、存在の権利をもつことになる、それらの断片はある程度の影響を与えてきたし、幾分か効果をもつものであった。私は、何度も理論に見切りをつけているが、他方、自分に見切りをつけることは稀である。

実践、これは私の過去であり、私の人生であり、主観的な経験の総体であり、過去の失敗、失望、敗北、勝利と大勝利、否定的な感情と肯定的な感情、これらの記憶である。実践というものは、理論のなかの嘘を摘発し誤りを見つけようとしながら、疑い深く点検しそれを露にするものである。たぶん実践においては、たぶんそこに、たぶんそれを左右するその条件として現れてきたものは、つまり、私の仕事において私のなかに交互に現れてきたものがある。ルーティンか探求かである。

<ルーティンか探求か>:

ルーティンへ導くのは平凡な意思である。それはすべてにおいて負担を軽減し、仕事を単純化し、それを機械的にこなし、時間やエネルギーの効率の点から自分にとってもっとも好都合な小道を踏みならそうとす

るそういう意思である。ルーティンは、情緒的に仕事に没頭することを許さず、疑いを消して、均衡を保つようにさせる。あなたは役目は果たし、きちょうめんには働いている。私にはもう簡単なことだ、頭を悩ます必要も、最良のものを探す必要も、どこかに注目することさえ必要ない。私にはきちんと、もちろんわかっている。私はこなす。私は自分のことを知っている。新しいもの、それは私が望んでこなかったもの、期待していなかったもの、それは邪魔なもので私には腹立たしいものだ。私が欲しいのは、まさに私がすでに知っているものだ。理論というものは自分の見解を支援するところのものであって、それを論破したり掘り崩したり混乱させたりするそういう権利をもっていない。いつのことだったか、私はやっとのことで自分の感情を抑えて、理論の輪郭から詳細な見解、プラン、プログラムを作りあげたことがある。どうにかこうにかできた。心配であった。あなたは「だめだ」というかもしれない。仕事をやるにはやった、しかし私は再び仕事を開始する気になれなかった。ルーティンの極致、それは動揺しないこと、アドホックにひろい集められた権威によって補強された自前の権威である。私も、また、その他のもの（一連の引用句、名、肩書き）もそうだ。

では探求とは？

私は他者が知っていることから始め、自分でできることを組み立てる。望むことは、根本においてそして神にかけて望むことは、外部からの命令や他者のコントロールの前に立つ恐怖にしたがってではなく、自己の善なる自由な意思にしたがって、絶えざる良心の助言のもとでやるということである。自己の快適さのためではなく、自己の精神の豊富化のためである。そして他人と自己の見解を同等に信頼することなしにである。私は、知ることなく、問題を探し、問題を立てる。労働において私は自己を鍛え成熟する。労働、これは私の個人的な生活の深いところでもっとも価値あるものである。何が容易なことかではなく、何がとりわけ全面的に有効なものかである。深く掘り下げながら複雑さのなかに身をおく。認識するとはすなわち悩むことであると私は理解している。多くのことを認識したというのは、悩みぬいたということである。私は、失敗というものは偽善的な希望の結果ではなく、やっど手に入れた証拠文書であると評価している。どの失敗も、これらは思考の活動に対するそれ自身新たな刺激である。今日のどの真理も、これはある段階に過ぎない。次がどのようになるか私は見通すことができない、私がかかりに活動の最初の段階を理解しているのなら、良いのだ。じゃいったい、その各々は何を宣言し、どのようなものなのか、教育活動のこの最初の段階とは何なのか。

<教育者にとって最も肝要なもの>

もっとも肝要なもの、これを私は仮説する、教育者というものは冷静に事実を評価しながら、できなければならないこと。それは任意のケースで任意の者を丸ごと赦すということ。すべてを理解すること、これはすべてを赦すことである。

教育者は、ぶつぶつ不平をいったり、不満を述べたり、声を荒げたり、叱ったり、威したり、罰したりすることを余儀なくされるが、その魂において、自分自身のために、過失や逸脱や罪に対して寛容な態度をとらなければならない。子どもが過失を犯すのは、知らなかったからであり、考えて来なかったからであり、誘惑や唆しに耐えることがなかったからであり、試したからであり、別の方法でできなかったからである。

たとえ、故意であって悪い意思が働く場合であったとしても、責任はこの悪い意思をひきおこさせた何者かにある。穏やかで、寛容な教育者は、ときには先行者の手荒い専制主義にはむかった群れを一掃するために、大衆的な怒りの襲撃が終わるのをじっと待つことが必要である。挑発的な「嫌がらせ」、これは試しの石、点検であり、実験である。終わるのを待つこと、じっと耐えぬくこと、これがすなわち勝利となる。

<子どもの悲しみを理解されよ>

子どもに対して、その子が今存在するために、また、その子が生まれあるいは生活が彼を育てて来たようにして今のその子があるということのために、憤りをおぼえる者、ふくれる者、侮辱を感じる者は教育者ではない。

恨みがあるのではない。あるのは悲しみだ。

悲しみ、それは、子どもを、迷わせながら、運命の転変へと向かわせるもの。重荷を背負うかかせをはめられているのか。かわいそうに彼はただ再び出て行こうとするだけだ。

新聞から読み取ることのできるどの訴えも、監獄も死刑も、教育者にとっては苦痛に満ちたモメント（記憶）である。

悲しみがある。怒りはない、同情があり、復讐はない。

<自分のことを理解しすべてを知って愛し続けてくれた大人、それが教育者>ト

しかし本当に腹をたてるなんて何と恥知らずなことか。見られよ、彼がどんなに小さく、痩せ、弱く、孤立無援であるか。彼がどうなるか、ではなく、彼が今日どうあるかである。ホールに陽気な叫び声そしているり色の微笑がある。子どもは知っているし見抜いている、自分の発育不全が重要な問題だということを。物思いにふけるがままにされよ、休ませるがよい。彼の汚れた大人の生活において時としてたった一人の人間についての思い出がどれほど強力な道徳的な発動機になることか、彼に良くしてくれた、そこでは彼は騙されなかったそういう人間のことに付いてだ。自分のことをずっと理解し、すべてを知っていた、それにもかかわらず愛し続けてくれた人。それが教育者である。

<その子が心の闘いをやめるとき>フ

子どもというものは自らを汚しやすいものではなく、汚されやすいものだということを信じるべきである。罪を犯した子どもも子どものままである。この点は一秒たりとも忘れるべきではない。彼はまだあきらめていない、彼はまだ“なぜなのか”がわからず驚いている、がしばしば彼はみんなとは違う、別の何か悪いものだということに気が付いてぞっとしている。“なぜなのか”と。彼が自分と闘うのをやめるのは、それは、彼があきらめてしまうときか、これはもっと悪いが、人々があるいは社会が、彼の自分との重苦しい闘いの側に立っていないと彼がそう判断したときである。彼が“僕はみんなと同じか、いやひよっとしたらもっといいかもしれないのに”と、そう話すときだ。

<助けることができないならただ痛みを緩和する>ハ

野生の猛獣を馴らす猛獣使いの仕事がどれほど誠実で価値あるものか。野生の本能の凶暴さに対して人間は一貫して毅然たる意志をもって対峙する。精神の力によって支配するのである。教育者は、息を殺して、仕込みの新しい方法を追求することを義務づけられている。可愛がることによってであり、鞭やピストルによるのではないそういった方法をである。しかし、ここで言っているのはせいぜいトラかライオンの話だ。

驚くことはない、従順な子どもでさえ、教育者が乱暴であれば、怒り狂ってしまうじゃないか。

私は子どもに矯正することを要求しはしない。彼らの罪を償わせるのである。生活、これは舞台だ。より大きな満足を得る瞬間もあればあるいはより少ない満足を得る瞬間もある。人間が評価されてはならない。評価されるのはその行為だ。

病院や診療所の学校はその数に入れられていない、そういう教育者の思考と感情には大きな空白がある。私の課題は、医者としては、もし私が助けることができないならただ痛みを緩和すること、もし私が治療することができないときなら病気の進行をくい止めること、また、もし別のやりかたが許されないなら、すべての兆候かいくつかの兆候を弱めることであり、つまり多くのことではない。これがまず第一。これでもう終わりなのではないが。私は病人に向かってたずねたりしない、私が彼に保障する健康をどのように利用しようとするのか、害のためか利益のためかというようなことを。そこでは私は一面的であろうと欲する、お望みなら鈍感になろう。医者は、死刑を宣告された者を治療するとき、どぎまぎしたりはしない。彼は任務を遂行するのである。残りのすべては、彼の責任ではない。

<教育者は今日という日に責任を負っている>ホ

教育者は、はるか将来に向かって責任をとることを義務づけられているのではなく、彼は悉く今日という日に責任を負っているのである。このフレーズが反発を招くことを私は知っている。普通は、ちょうど逆のことが考えられているが、私の確信では、間違いである、誠心誠意。しかし、本当に誠心誠意（そう考えられているの）か？いやたぶん、ごまかしだ。責任を猶予し、どの1時間においても責任をきびしく問われるすである今日よりも、はっきりとしない明日に向かってその責任を先延ばしすることの方が好都合だ。間接的には教育者は社会の前で未来に対しても責任を負っているが、しかし、直接的にはまず第一には生徒の前で現在に対して責任を負っているのである。

明日という日の高尚なプログラムの名において今日という日をどうしても軽視しがちである。しかし、「道徳を改善すること」、これは同時に善を育てることでもある。善を育てること、その善は子どもの中にあるもの、不足や短所や生まれつきの悪しき本能にも拘わらず、子どもの中にあるもので、これを育てることである。信じやすさ、人々への信頼、これは、悪すなわち時にとり除いてはならず困難を伴って発達を一時休止させてしまうという悪に対抗するものとして、本当に、守り発展させようという善ではないのだから

うか。

現実の方が多くの教育者より柔軟で寛容であるということがどれほどあることか。恥ずかしいかぎりだ。そして、ほら、人間は何年もの労働や思考の緊張そして重苦しい経験の後で、最終的なこれらの真理に到達したときに、彼はそれを見て驚く。自分では何ひとつそこに新しいものを見出していない、すべてそれらはすでにずっと前から理論によって語られ、ずっと読み聞かせられてきたことであつたと、つまり、彼は聞いてきたし、知っていたことなのである、しかし、いまや、これを経て、実践のおかげで、彼はこれらのことを感じ取ることもなったのである。

理論と実践のあいだにある差異のみを見ている者は、そこでは情動的に現代の理論水準に到達しているとはいえないのである。そこでは、活字で綴った書物によってではなく現実のもとでより多くのことを、学ばなければならないのである。そこに不足しているのは、できあいの処方箋ではなく、重苦しい労働でやっと獲得した真理を感じることができ、本当の理論に親しむことのできる、そういう魂の能力である。」

VII. 「子どもによる教育者の教育」1926 nr 2『特殊学校』(②⑥)

第一回ポーランド特殊教育教員大会での講演 1925,12.21

＜教育者は人間(子ども)・社会(子どもの集団)を理解しながら・・・成長する＞⁷

若い教育者の素朴な見解、それは、すなわち子どもを監督し、コントロールし、学ばせ、教え込み、根こそぎにし、形づくる、そうしながら彼自身の方は、もう大人で、すでに形づくられ、変化しないものであり、仲間やとりまき、そして子どもからの教育的な影響を受けないものだという見解である。そのため、彼に委ねられた子どもを監視しながら、自らに批判的に接近することができず、大きな危機に直面する。私は専門的な精神衛生学がまだひろくは知られていないことよりも、この危機に注目することを望む。教育者は人間(子ども)を理解し、そして社会(子どもの集団)を理解しながら働くことによって、重要な価値ある真理の理解に到達・成長するものだ。自分に対する警戒を怠たらないこと、そういった労働を軽視すれば、墮落するのである。

＜子どもは私を経験によって豊かにし、私の見解や私の感性の世界に影響を与える＞⁸

子どもは私を経験によって豊かにしてくれる、私の見解や私の感性の世界に影響を与えてくれる。私は子どもから指令を受けとり、そして私は自身に要求し、自らを叱責し、自分に寛容さを示すか、あるいは、身の証を立てるかする。子どもは私に学ばせることもあるし、私を育てることもある。

＜教育者にとって子どもは自然の書物である＞⁴

教育者にとって子どもは自然の書物である。彼はそれを読みながら一人前になる。子どもを軽んずるべきではない。子どもは自分のことを知っている、私が彼らについて知っている以上にだ。子どもは、寝ずにいるときのすべての時間、自分と交際しているのである。私は子どもの謎を解こうとするだけである。だから私は間違う。

私は子どもの市場価値をまた欠陥を評価する。不精で無規律で気まぐれな子は、うそをつき盗みもする・・・しかしこれはまれなことだ。その子の自分自身に対する眼差しはどのようなものか。他の子どもや教育者に対する態度はどのようなものか。その子はどんな経験を手にし、どんなものに対して力を行使したり妥協したりすることができるのか。不屈の精神をどのくらい表に出しているのか。

子どもに高みから対処してはいけない。子どもが何十人かいればそのなかには、まれにだが思慮深く、観察力にすぐれて、批判的な力を持ち、精神的な集中力をもって、一面的な経験に基づき、皮肉をいい、画策を好み、復讐しようとする者もいる。集団は、審議し、議論し、語り合い、そして、観察を交換しあい、教育者をすっかり知り尽くすことになる。そして、教育者を自らの意思の手段にしたくなる。その不十分な点、優柔不断、弱点、欠点のすべてを利用するのである。しかし度を越えたり自分を欺くといったことはない。教育者を厳格な審判にかけ、良心的な試験に服させ、そして、公正に評価する。そして、信頼するか、決定を延期するか、閉じこもるか、秘密活動をするか、隠れるか、開戦を宣言するかである。教育者に悲運を！と。教育者は、すでに子どもの「強情さ」だけで驚いているが、一部に現れている「悪影響」や自らの「権威」に対する画策、そして、仕返しとしての嫌がらせの行為もある。

教育者には、自分の対処のあり方や自分自身に対する「あなたは間違っている、あなたが正しくない」といったいかなる注意も聞かえない。ところでこれが教育者の善なる意思の良心の声なのである。

あなたが最初から敵対的な不信の雰囲気の中に入り込むこともよくあることだ。あなたの前任者が、暴君かガミガミ屋で子どもたちを強情にし激怒させていたような場合だ。ここでは、無味乾燥な命令も素朴なお説教も事態を悪化させるだけだ。忍耐で武装し、じっと耐え続けることが必要である。行動によって克服することが必要なのである。

<子どもは教育者に対して、厳しくたしなめ、罰を与えることも、報復することもある>†

子どもは教育者に対して褒美を与えてくれるが、しかしまた厳しくたしなめることも罰を与えることもある。和解してくれることや、忘れることもあるいは意識的に許してくれることもある、そして、報復することもある。

毒をもって開始し、あざ笑い、平穩を乱すこともある、短気な者に一揆を起こさせるとか、愚か者を従わせるかして(だからかくもしばしば罪のない者は悩むのである)。とにかく無理矢理獲得しようとする、模範とせよ。教育学の主要公理によれば、範例を示せ、だ。言葉ではなく、行為によって。

教育者はジレンマに陥る。つまり、彼は、自らの欠点との終わりの見えない重苦しい困難な闘いに入るか、あるいは、こちらが好都合だが、理論を呪うかである。つまり、本は嘘をいつている、権威者、これはベテラン師だと。生活、これは学者の文机ではない。免許状は私に権利を与えてくれた。私は今やすでに、私自身の力をもつ私自身であるということ。しかしこれは良いことでもあるのだが、おそらく、その免状は今我が国にはない。おそらく、別の条件のもとでそれは与えられる。おそらく、それは、別の、子どもたちによってだ。

私の場合、それは、徒党、悪党仲間、ならず者たち(家畜!)である。激烈さが必要である。これに続くのは、禁止と制限である。彼らの生活や経験と自分の生活との間にある完全な乖離。秩序がありさえすれば、だ。秩序、これは鉄の掟とならなければならない。そこにいるのは、もはや教育者ではなく、子どもの問題の熱心な擁護者ではなく、若き者、幼き者、弱き者の擁護者や未経験者のための牧師でもない、監視者であり、不公平な検察官であり、食料管理人であり、刑吏である。教育者でなく、主計である、つまり、軍の建物や排水設備や倉庫、事務所、ズボンやシューズの記録係を管理する者である。

<管理するという仕事>†

私はいまや管理を過小評価してはいない、そうすることは許しがたい誤りであった。杓子定規に正確に管理するとは、浪費しないことが目的だ。それは Res Sacra (聖なる事業)だ。そして、子どもたちは理解しなければならぬし、感じなければならぬ。子どもたちのためにあなたが額に汗してこれを手に入れ節約しているのだということ。あなたが行政官として命ずることが正しいといえるのは、それを教育者として見逃そうとするときだけだ。

しかし、お気に入りやガリ勉や信頼できる下僕だけを認めてやりながら、もし教育者が子どもたちとの接触を失ってしまうなら、果たして本当に彼は熱心に管理するという労働を引き受けたことになるのか、本当にそうすることに価値があるのかどうなのか。また、彼が、やがては無権利で言葉をもたない成り行き任せに放り出された者(子ども)たちを相手にひと儲けしてやろうと思っている者たちと、本当に同盟を結んでしまうことにはならないのだろうか。本当に彼は、ただ熱心な奉仕者のふりをするばかりで、時と共に不誠実な経営者に、また墮落した人間になってしまわないといえるのだろうか。より楽にさえなれば、より安く抑えさえすれば・・・それは、自分にとっての最大の利益を得ることだと。書物と鞭の番人、それと決まり文句、私は子どもを鍛錬し、規律へ向かって教え込む、未来の社会のメンバーを育てております、とそう語るのだ。

<後悔の涙や無力の涙のことを理解できる、そういう高みへ自分を育てよ>†

自己教育そして自己確立への道程を、あなたは、自分で、自分のなかに見出さなければならない。若き教育者よ。あなたは、たくさんの長い影を落とすことによって、高いところに飛び立つことができる。ささやき、微笑、まなざし、しぐさという言葉を理解し、罪を犯した子どもの、後悔の涙や無力の涙のことを理解できる、そういう高みへ。」

VIII. 『もう一度子どもになれば』まえがき 1925年(⑤)

<彼らの感性の高みへ>‡

「子どもには疲れるとあなたはいう。そのとおりだ。しかし“だって彼らの考えまで降りなきゃならないの

だから。身をかがめ、腰を曲げ、身体を縮めなきゃならない”と説明するとき、あなたは間違っている。私たちが疲れるのはそのためではない。そうではなくて、彼らの感性の高みにまで高まらなければならないからだ。高みをめざして、つま先立ち、背伸びをしてだ。無礼にあたらないように。」

IX. 「感性」1927/8nr3-4 『特殊学校』(②⑥)

＜人間を認識すること、まずは子どもだ＞

「人間を認識すること、すなわち、まず何より子どもを、千通りの方法で研究することだ。別の方法があるのか？私の方法はそれに劣るだろうか。いややはり私はこれでやる。学問的にではなく、家庭でやるやり方で、観察する、肉眼で。

そして自分の脳裏に浮かぶ、知性ではないということ。違いは見えない。子どもたちと私、その同じ思考のプロセス。すべて全く同じもので、私は長く生きていくだけのことだ。

＜一緒に感じることだ＞

しかし、感性の分野では子どもは違う。したがってだ、議論すべきではない、そうではなくて一緒に感じる必要があるのだ。子どものように、喜んだり、悲しんだり、愛したり、怒ったり、恨めしく思ったり、はずかしくなったり、心配したり信じたりすること。これは自分ではどうしたらいいのか、もしわかったのであれば、他人にどのように教えたらいいのか。

児童学。これはおそらくたわごとになるが、子どもの肉体的な発達について多くのことを語ると共に、それと同じくらい感性についても語られるべきであり、そのあとでようやく、知性について語るべきなのだ。」

X. 「子どもをいかに愛するか」第二版 まえがき 1929年(⑤)

＜教育者にとっての真理・財産とは＞

「教育者の真理とは、これは経験の客観的評価であり、ただひとつ最終的には、深い思考と感知の瞬間である。

教育者の財産とは、自己を不安にする諸課題の数と重みである。」

XI. 「子どもの権利の尊重」1929年(④)

＜子どもは友人としてふさわしい価値をもつ＞

「長年の経験からますます明らかとなってきたことは、子どもは尊敬され信頼するに値し、友人としての関係に値するということだ。そして、優しい感性と陽気な笑い、純真で明るく愛嬌ある喜びを我々は彼らと共にすることができるということ、さらに、この仕事は、実りある生きいきとした、美しい仕事であるということも。」

＜子どももわれわれと同じ人間だが異邦人＞

「子どもには未来がある、しかし、過去も、ある。記憶する出来事、思い出、そして、本当に自分だけの物思いに耽った多くの時間がある。

我々と同じように、…違ってないのだ…、彼は覚えもするし忘れもする、評価したり過少評価したり、論理的に思考したり、もし知らなければ間違いもする。信用することに慎重であったり、疑ったりもする。

子ども、それは異邦人である、彼は言葉を知らないし、通りの方角を知らない、法律も慣習も知らない。時折自からどこかに迷いこんでしまうことがある。指示を求めることも助言をうることもできない。礼儀正しく質問に答えてくれる案内人が必要である。」

＜子どもの今、今日という日を尊重されよ＞

「今という時間を、まさに今日という日を尊重されよ！もし我々が子どもに、意識的な責任ある現実をもって今日という日を生きさせてやらなければ、いったい、子どもはどのようにして明日を生きることができるのか？

ふみにじることなく、圧力をかけることなく、明日の奴隷にもどすことなく、非難することなく、急がせることなく、追い立てることなく。

その各々の瞬間を尊重されよ、なぜなら、それはすぐに消え去り二度と現れないからだ。そして、それは常に真剣勝負である。 . . .

明日の名において否定する？いったい、それは、それ程魅力があるものなのか？私たちは、いつも、これをあまりにも明るいペンキで塗りたくってきたのではないかと。予想どおりだ。屋根がくずれ落ちた。なぜか？建物の土台に然るべき関心を払っていないからだ。」

＜子どもがあるがままで存在する権利＞

「子どもがあるがままで存在する権利

将来彼が大きくなって何になるのかと我々は不安な気持ちで自らに問うてみる。

我々は、子どもが我々より以上のものになることを望んでいるのだ。我々には完成した未来の人間が夢である。

用心深く自らのうちにある嘘を見破るべきである。それは、美しい言葉で粉飾されたエゴイズムの烙印が押されるべきである。あたかも自らのことは忘れて献身的であるかのようで、その本質は、手荒なペテン師である。・・・」

＜罪を犯した子どもには愛情が必要である。彼らと連帯を＞

「“何で私を生んだの。だれがこんなひどい生活をするよう頼んだの”。

胸の奥底に秘められた秘密を打ち明けることにしましょう。最も打ち明け難いことだが。何かの約束違反や失敗には、辛抱づよい友人のような寛容さで十分である。罪を犯した子どもには愛情が必要である。彼らのいかり、荒れはもっともなことである。彼らの平板な徳にたいする無礼を心から理解してやるべきであり、たった一人で罪をかぶっている彼らと連帯すべきである。今すぐにはないとしても、彼に微笑みの花束を贈ることができるのはいつのことだろう。」

＜教育者の課題は、彼を生かし、彼が子どもであることの権利を獲得させることだ＞

「いったいわが国の教育者の役割とはどんなことなのか。

壁と家具の番兵、家屋の静けさや把手や床の番兵である。家畜が畑に入り込んで荒らさぬよう、大人の仕事やのんびりとした休息の邪魔をせぬよう追いたてる牧人、また、ぼろぼろのズボンや靴の管理人であり、みすばらしい粥の配給係りである。大人の特権を守る番兵であり、大人の道楽好きの気まぐれなふるまいの怠惰な遂行者である。

恐怖と警戒の屋台、道徳的ガラクタでつまった行商木箱、店から持ち出しの変性アルコールのように、もう香りもなにもない、混乱させ、ただ眠らせるだけの知識を販売している。覚醒させ、蘇生させ、喜びを与えるかわりにである。陳腐な徳の代理人。我々は、子どもたちには尊敬と従順を強制し、大人達には彼らが心から同情したりしばらくの間こちよく興奮するのに手をかさねばならないというわけだ。ほんのわずかな金で強固な未来をつくりだそうというのだ、欺き、隠しながら。子どもとは何か。これは大衆であり、意志であり、力であり、権利である。

医者は、死の淵から子どもを引きずりあげた、教育者の課題は、彼を生かし、彼が子どもであることの権利を獲得させることだ。」